



これからの世の中を生きていく生徒に必要な英語教育とは？

変わらない英語教育の本質的な転換が求められている

中等教育で6年間英語を学んでも使えない。英語が苦手になる。「4技能重視」「コミュニケーション英語」「英語表現」「小学校からの英語教育開始」等は、このような問題への対応策として打ち出されてきた。しかし、にもかかわらず一部を除いてはあまり大きな進展は見られないという。その原因は、従来型のコンテンツを教え込むコンテンツベースの教育から脱し切れていないことにあるのではないのだろうか。求められているのは、能力を活用するコンピテンシーベースへの転換ではないのだろうか。このような現状を越えていく方途を、「教えない授業」に取り組む山本崇雄先生(新渡戸文化学園)に取材しつつ考えてみた。

取材・文／教育ジャーナリスト 友野 伸一郎

「4技能重視」で 高校の英語教育は変わったのか？

これまでずっと、日本の英語教育には問題があると指摘され続けてきた。

中学・高校と6年間、最近では小学5年生から始まるので8年間も英語を学習しながら、なぜ使える英語が身に付かないのか。対策として、英語の4技能の習得が打ち出され、また「コミュニケーション英語」や「英語表現」という科目も新設された。

筆者はずっと日本の英語教育の最大の問題は、歴史的に明治以来、欧米文化の移入のための翻訳英語が中心をなしてきたことにあると考えてきたので、この改革は大いに成果をもたらすだろうと期待した。しかし、それでもまだ英語教育の実態はそれほど変わっていないのではないかと。

なぜか。英語の先生方に話を聞くと、「4技能重視」や「コミュニケーション英語」「英語表現」というように看板は架け替えられたが、実態としては旧来の英語教育が多くの場合継続されているからだという。つまり多くの場合、「コミュニケーション英語」では旧「リーダー」の授業が、そして「英語表現」では旧「文法」の授業が、ほとんどそのまま行われている実態があるというのである。

そして教科書も、例えば「英語表現」では旧来と同様に英文法の練習問題が掲載されている。なぜかと言えば、これを生徒にやらせる授業には多くの先生が慣れていて、「慣れた授業を行い続けたい」という力学が働くからだという。だから、そのような旧来の授業を続けられるような教科書が採用される傾向も強い。

筆者は、これまで、いくつかの先進的でコミュニケーションを中心にした英語授業を見学してきたし、紹介記事も書いたことがある。実際に、そのような新しい授業で英語力を付けて大学に入ってきた学生の例も多数知っているが、それが一部に過ぎず、まだ多くの生徒が置き去りにになっているとしたら、それは大きな問

題ではないだろうか。

そう考えて、「教えない授業」で知られる新渡戸文化学園の山本崇雄先生に取材した。

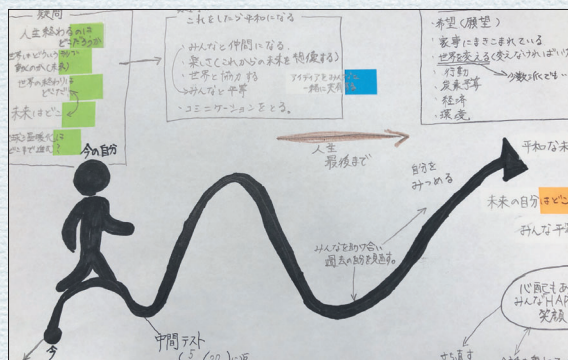
内発的動機がないまま英語を教え込んでも 英語嫌いを生むだけ

山本先生は、新渡戸文化学園では中1と高1の英語を担当されている。まずお話を聞いて驚いたのが、「中1では英語をすぐに教えることはしません」という言葉だった。

近年では小学校で英語の授業があるとはいえ、同校に入学してくる生徒の英語力はさまざまだ。その段階でアルファベットや単語を無理に覚えさせても苦痛になり、英語が嫌いになるだけである。

そこで、授業では生徒たちに将来の見取り図を描かせる。そして自分にとってなぜ英語が必要なのかを考えさせるのである。そのプロセスでは、生徒たちにSkypeやウェブ会議システムZoomで海外の人とつながらせるなど、刺激を与え揺さぶっていく。

そうすると、最初は単純だった将来の見取り図が次第に意味



生徒が描いた「将来の見取り図」①



生徒が描いた「将来の見取り図」②

を含んだものに進化していく。そして、「自分の世界を広げるために英語を学びたい」「SDGsを考えるために英語を学びたい」といった動機が生まれるようになってくる。「世界の同世代100人とSkypeで話したい」という生徒もいる。

その段階で、ようやく生徒たちは英語を学び始めるのである。こういった内発的動機が生じない限り英語を無理に一方に教えることはしない。その動機が生まれるのを、長ければ1～2年は待つ覚悟が必要だと山本先生は語る。

そして実際、フィリピンの子どもたちとSkypeで話した生徒たちは、「楽しい! もっと英語を学びたい!」と変わっていく。

その際に、山本先生が指導することは、「英語で自己紹介できるようにしよう」ということであり、「教科書の中で挨拶の言葉を探してみよう」「(自己紹介のために)自分の好きなことや好きな物を書いてあるところを探してみよう」ということである。

だから、山本先生の授業では、生徒たちの英語の教科書の使い方が他と違う。教科書の最初の単元から覚えていくのではなく、教科書から自分に必要なこと探し出し付箋を貼って使っていくのが先になる。ある意味では、山本先生のクラスの生徒の方が教科書を使いつくし、学びつくしているとも言えそうだ。

● 「本気で大学に行きたいのか？」 の問いかけから生まれた変化

「教えない授業」という言葉はインパクトが強いが、先生が何もしないことを意味しない。「教える」から「学ぶ」へ、すなわち生徒が学ぶことを中心に置き、ファシリテーターへと教師の役割の転換を目指す教育のことである。

英語に関して言えば、「教えない授業」とは英語を学ぶ目的をもたせる学び方を手に入れさせるということだ。そして、英語はその目的を達成するためのツールであるということを確認する。目的がはっきりしていればいるほど、生徒たちは主体的に英語を学ぶようになるのである。

これは、英語学習に限ったことではない。

そう山本先生が気づいたのは、かつて勤務していた進学校でのこんな経験からだ。

進学校では、大学受験の前に総決起大会を開くところが多い。多くの先生が「がんばれ! 絶対合格!」と発破をかける中で、「君たちは本気で大学に行きたいのか?」と投げかけた。「なぜ大学に行くのかを考えよう。大学がすべてじゃないんだ。だから安心して失敗して大丈夫だよ」と語りかけた。そして、大学の先の10年後、20年後を考えさせようとした。

こうした働きかけはどのような結果に結びついたのか。

「例えば、有名私立大学の文系全学部を受験するというような生徒はいなくなりました」と山本先生。ブランドだけで大学を選ぶ生徒はいなくなり、自分のやりたいことを考えるようになったのだという。

● 中1の英語ノートには dogやcatの単語はない

新渡戸文化学園での英語の授業に戻ろう。

フィリピンの子どもたちとSkypeやZoomで会話する。しかも1対1ではなくグループで会話する。そのとき、お互いに一番多かった質問は何だったと読者はお考えだろうか?

それは「Do you have a boyfriend?」であった。生徒たちが最も関心がある話題だからだ。そして、「その質問が通じたときの、生徒たちの嬉しそうなお顔といったらありません」と山本先生は語る。

「通じると楽しい!」「もっと英語を使いたい!」「コミュニケーションしたい!」という気持ちが高まっていく。スパルタで詰め込んでも英語が嫌になるだけである。

そして、「英語を教えてほしい」という気持ちが高まったときに、初めて教えるのである。

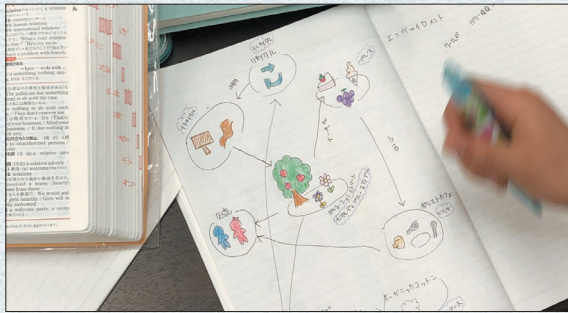
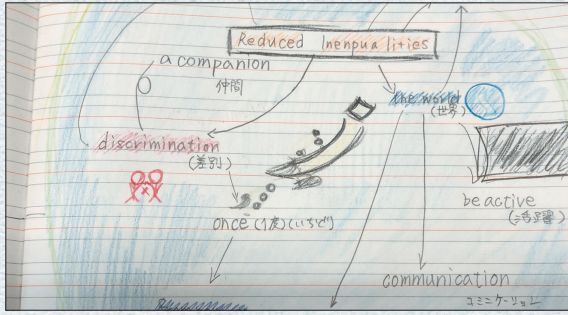
もちろん、これは最も初歩のきっかけに過ぎない。フィリピンとの交流では、その後は日本とフィリピンのそれぞれの社会問題を語り合い、解決策を議論していく。

また同校では、チャレンジ・ベースド・ラーニングに取り組んでいるが、この中学1年生のクラスでは、「持続するカフェをつくる」ことがチャレンジのテーマだ。

そのための予備学習として、理科と英語のクロスカリキュラムが組まれている。これは英語で理科を教えるのではなく、貧困問題という社会的テーマを理科と英語の2つの教科から考えるという取り組みである。

カフェでは、「プラスチック問題」「食の安全」「フェアトレード」などが関係してくるが、理科では「トレーサビリティ」について考える授業を行っている。そして英語では、「海外ではどんなオーガニックカフェがあるんだろう」「そのメニューにはどんなものがあるんだろう」と生徒たちはネットで調べる。

そうすると、中学1年生のノートには「discrimination(差別)」「communication」などの単語が並ぶことになる。多くの中学1年のノートのような「dog」や「cat」は書かれていないにもかかわらず、である。



「英語と理科のクロスカリキュラム」での生徒のノート

眠くなる授業で 英語力が高まるはずがない

「授業計画書で、今日の目的が『現在完了の継続』と書かれているような授業のあり方は本質からずれていますよね」と山本先生は言う。

わかりやすく説明することが目的の英語の授業で、先生が一方的に説明して生徒はぼんやりとわかったような気になり、教科書を開くと先生が言ったことと同じことが書かれていて、それで「先生が説明してくれた通りだ」となっている授業。しかし、そんな授業ではクラスの3分の1から半分くらいの生徒が眠ったり睡魔と戦ったりしているのではないだろうか。

生徒が明確な目的をもって授業中に英語で調べたり、感想を話したり、質問を考えたりとフルに活動している授業と、半分近くが眠っている授業とではどちらが英語力が伸びるかは明らかだろう。

では翻って、大学の英語教育はどうだろうか。

入試の合格が目的とされるような英語教育を受けてきた学生も、大学に入ると次第に「目的」が形成されてくる。「起業したい」「国際的なビジネスに関与したい」等々。その目的を実現するためにも英語が必要になってくる。

しかし、大学の英語授業でも先生が一方的に英語を話し、説明し、学生が説明を聞いているだけの授業もまだ多い。英語嫌いや苦手意識の再生産が繰り返されているケースも少なくない。ここでも問われているのは、コンテンツベースからコンピテンシーベースへの英語教育の転換であると言えそうだ。

こうした陥穽を越えるために、英会話スクールとの連携などを含むさまざまな取組みが行われているが、大学としての質を担保した英語教育がこれからの大きな課題であることは間違いない。

「教えない授業」で英語を学んだ卒業生の声

「教えない授業の始め方」(山本崇雄著 アルク)より一部を抜粋

「自分から英語を学びたいと思わせてくれる授業です」

早稲田大学 文化構想学部 2年 伊与部 夏花さん

私が中学に入学して、初めて受けた英語の授業が山本先生の「教えない授業」で、以来、高校を卒業するまで、ずっと山本先生の授業を受けてきました。つまり、「教える授業」を受けたことがありません。そのため、山本先生の授業が当たり前になっていて、他の英語の授業スタイルを知らずに大学に入学しました。

大学で受けた英語の授業で「ペアワーク」や「グループワーク」の概念が周りとは違うことに気が付きました。周りのみんなにとってそうした英語の活動は、授業中、必要最小限に行うもので、それ以外の会話は日本語で行うのが普通なのです。山本先生は授業の中で、私たちが英語を使って活動する時間を多く取ってくださいました。ペアワークやグループワークでは、意見交換や調べた内容の発表を行うだけでなく、週末の過ごし方などの雑談も全て英語で行っていました。これらの活動では、相手に伝わる喜びや、伝えきれないもどかしさを感じる瞬間が多かったです。しかし、そういった瞬間を繰り返し体験したからこそ、「どんな英語を使ったら分かりやすいか」「どう表現したら相手に伝わるか」を意識的に考えるようになりました。英語を学べば学ぶほど、自分の言いたいことが相手に伝わり、また相手の言いたいことを理解できるようになるという実感は、英語を学ぶモチベーションになりました。そして、いつしか英語を話すことが大好きになりました。

「教えない授業」に成果があるかは私にはよく分かりません。しかし、一つ自信を持って言えることは、今自分が英語を好きなのは、山本先生あってこそだということです。

「誰かのために何かをするときに いちばん一生懸命になれます」

慶應義塾大学 総合政策学部 2年 九鬼嘉隆さん

山本先生の「教えない授業」はやはり「スゴイ」です。そう感じる理由はたくさんありますが、中高生目線でメリットを挙げてみると、①教えられていないのに覚えが早いこと、②予習復習が必要ないこと、③「教えない」と言いながらも、困ったときは教えてくれることもあること。そして、④アクティブだから、授業が眠くならないこと。さらに、⑤クラスのいろんな人と話しながら勉強するので、好きな異性と話せること(笑)です。授業スタイルが、僕には向いていたのかもしれませんが。そんな授業を6年に渡って受け続けたことで、学びの姿勢や学習スタイルなども大きく変わりました。例えば、自習に「一人家庭教師」という方法を取り入れるようになりました。これは自分で編み出した勉強法なのですが、山本先生の「教えない授業」から学んだことを生かした方法です。それは、「人に教える」という行為が自分にとって最も学びになるということです。誰かのために何かをするときに、人間はいちばん一生懸命になれるのです。だから、一人で勉強しているときでも、もう一人の自分に説明するようにしゃべりながら勉強すると、理解が深まるのです。この方法は、大学生になった今でも役に立っています。

※学年は書籍発行当時(2018年)のものです。